

El la “Verda Biblio”

verkita de Izrael Lejzerowicz
eldonita de Libro-Mondo kaj Grafokom, 2014
63 paĝoj

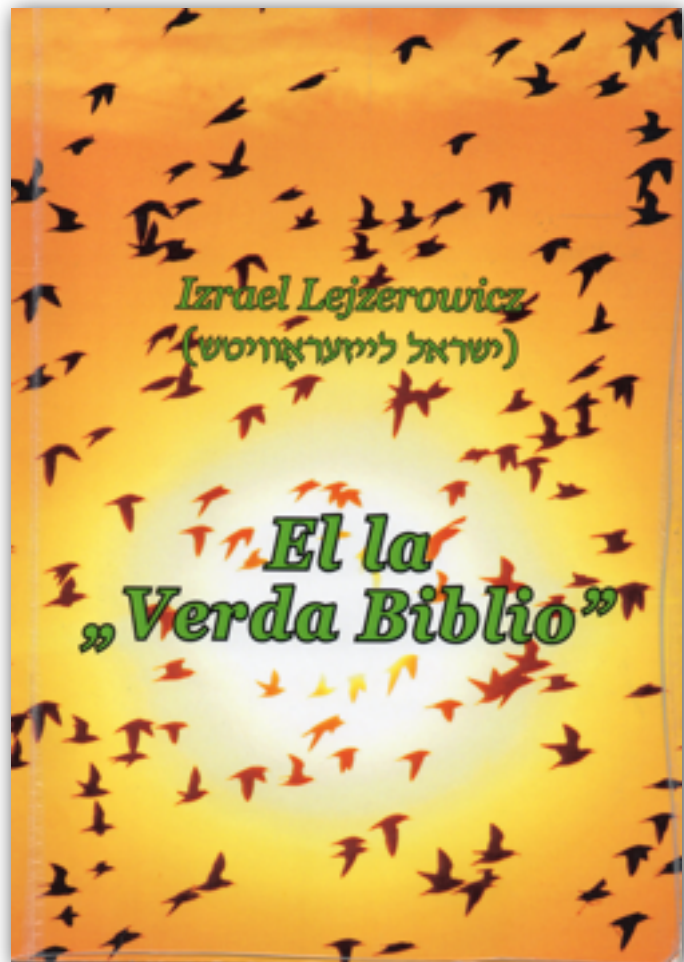
「初めに、形のない神秘はヴォラピュックを創造された。ヴォラピュックは形がなく、混沌としていて、闇がその内にあった。そして、形のない神秘は言われた。『光あれ』。こうして、エスペラントがあった。聖霊はエスペラントを見て、良しとされた。聖霊はエスペラントとヴォラピュックを分け、エスペラントを永遠の昼と呼び、ヴォラピュックを夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」

これは、イズラエル・レイゼロヴィッチ (1901~1942) の『「緑の聖書」から』の冒頭の一節である。この文章が旧約聖書の創世記冒頭にある世界創造のくだりのパロディであることは言うまでもない。本書には旧約聖書の有名なエピソードを踏まえて、同時代のエスペラント界を風刺した愉快なお話が次々に登場して興味が尽きない。登場人物の名前も、BofruntはBeaufrontの、Junio PagiはJulio Baghy の、Andreo Apud はAndreo Cseh のもじりである。

そのAndreo Apudがクラクフでの第23回世界エスペラント大会 (1931年) で聴衆に向かって、あなたたちはruĝaj katojかと問いかけた。聴衆は、いいえ私たちはverdaj azenojです、と答えた。このお話には、善良なエスペランチストたちに対する愛情と皮肉が感じられる (このくだりは、Raymond SchwartzのVerda Katoや“Verdkata Testamento” (1926) を踏まえているのであろう)。

同時代のエスペランチストは本書を一読して作者の意図をすぐに察し抱腹絶倒したのであろう。しかし、初版刊行 (1935年) からすでに80年以上が経過している。旧約聖書と戦間期のエスペラント運動、同時代史に通じていないわれわれにはピンとこない箇所も多いが、物語の背景をあれこれ調べたり、推理をめぐらしたりするのも読書の楽しみである。

ところで、読み進めていくにつれて、同時代のエスペラント運動に対する風刺にとどまらず、現状への批判の度合いが強まるように思われ、次第に笑えなくなってくる。それは当時



の世界情勢、とりわけドイツでナチスが勢力を拡大し、ついには1933年1月にヒトラーが政権を掌握したという事実に関わっている。例えば、jubilea jaroにケルンで善良なエスペランチストたちが悪魔にそそのかされて焚書しようとするお話が、アブラハムがイサクを神にささげる旧約の物語のパロディとして語られている。これは同年5月にドイツ各地で行われた焚書に対する批判である。と同時に、7月にケルンで開かれた第25回世界大会で、ハーケンクロイツを背景にホルスト・ヴェッセルの歌（ナチス党の党歌）がオルガン演奏された事実も重ね合わさられている。

『「緑の聖書」から』に加えて、“Babiladoj kun Horaĉo Serĉer”というタイトルのもとに収録されている4編の短編に至っては、主人公のSerĉerの思い詰めたような、いらだたしげな行為と思考は、もはや現状への告発そのものであると感じられる。

なお、本書には収録されていないが、雑誌Literatura Mondo 1933年5月号に掲載された“sangaj ludoj”は、まさに焚書そのものを正面から取り上げ、批判を加えている。そして、文化を破壊する蛮行に対して正面から向き合おうとしない中立的エスペラント運動をも批判している。そこには作者の鋭い危機意識が見てとれる。

作者は、ポーランドのウッチ生まれのユダヤ人で、戦間期のエスペラント運動で大きな役割を果たしたが、1939年のドイツ軍のポーランド侵入、第2次世界大戦の勃発後、ワルシャワに移り、ワルシャワ・ゲットーの劣悪な環境で過ごし、やがて捕えられてトレブリンカ強制収容所で妻や娘ともども殺された。その生涯は本書の巻末の編者あとがきで詳しく語られている。しかし、作者は亡くなっても、その批判精神は本書に刻印されていて、野蛮と蒙昧が支配する限り、何度でもよみがえる。

本書は、はじめLiteratura Mondoから刊行されたが、のち、2度にわたり再刊され、ここで取り上げたのは2014年刊行の第4版である。Libromondo（ポーランド）とGrafokom（クロアチア）との共同出版である。なお、本書にはポーランドの俳優でエスペランチストであったJerzy Fornalによる荘重かつ表情豊かな朗読のCD（冒頭の6章のみ）がついていて楽しめる。朗読はVarsovia Ventoのサイトでも聞くことができる（本稿執筆に際して、猪飼吉計氏および小川博仁氏から教示を得た）。

（La Movado 2017年8月号に掲載）

（追記）

1 第25回世界大会でホルスト・ヴェッセルの歌がオルガン演奏されたことは、下記で言及されている。

Ziko Marcus Sikosek “Sed homoj kun homoj”Universala Esperanto-Asocio, 2005, p146。

2 大会会場にハーケンクロイツの旗が掲げられていたことを伝える写真は下記に掲載されている。

“Esperanto en perspektivo”, Universala Esperanto-Asocio, 1974, p704。

3 本書初版の表紙について、このホームページの「図書館」の項に、「『「緑の聖書」から』の表紙をめぐる謎について」と題して草した小文が掲載されているので、参照されたい。